落語　得手不得手

紫 李鳥

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
大工見習いの佐吉は腕がいいのに、鉋だけは下手くそだった。その訳は……

目次

落語　得手不得手 ―― 1

落語　得手不得手

えー、秋風亭流暢（しゅうふうていりゅうちょう）と申します。
一席、お付き合いを願いますが。
ここで、お決まりの小話を一つ。
えっ！　ゆんべの台風で布団が飛んでったって？
そうなのよ、ふっとんだのよ！　亭主の布団だけ。
ま、なんで亭主の布団だけなのか、その辺は、さて置きまして、台風には気いつけてぇもんですな。ついでに亭主まで吹き飛ばされる可能性がありますからね。
ま、亭主がどっかに吹き飛ばされて喜ぶ奥方も、中にゃいるかもしれませんが。
「クッ。台風と共に亭主まで去っちまってさ、左遷（させん）みてぇにド田舎にでも飛ばされちまったかね？　〝台風と共に去りぬ〟なんちゃって。クッ」
って、悲しんでんだか、喜んでんだか分かりゃしねぇ。
ま、何事も紙一重ではありますが。
えー、季節柄、台風とは関係ねぇんですが、でいく（大工）の話でして。
えっ？　久しぶりの高座だなって？
へ。小説の語りやらをちっとばっか頼まれましてね、あっちこっち引っ張り凧だったもんで。
本業のほうが疎（おろそ）かになっちまって、ホント申し訳ねぇ。
ってことで話を続けさせてもらいますが。

でいく見習いの佐吉には、どうしても巧（うま）くできねぇことが一つありましてね。
「佐吉。何べん言ったら分かるんでい。これを見ろ、ガタガタじゃねぇか。なんで、真っ直ぐ平らに削れねぇかな……」
「……わカンナい」

「ッ。駄洒落なんか言ってる場合じゃねぇだろ」
「……すんません」
「金槌持たせても、鋸持たせてもうめぇのに、なんで鉋だけは下手くそかね……」
「……わカンナい」
「こんなデコボコじゃ、隣同士フィットしねえだろ？　見ろ、隙間だらけじゃねぇか」
「♪隙間だらけのテーブルを～をを……へぇ」
　棟梁に叱られた佐吉はしょんぼりするってぇと、鉋を巧く使えねぇのがよっぽど悔しかったのか、恨めしそうに鉋の出っ歯を睨み付けた。
　そんな時だ。母ちゃんの作ったうどんを食べてると、
「ほらよっ、これをかけるとうまいぞ」
　母ちゃんが削り節をパラパラと散らした。
「アッ！　これだっ」
　突然、佐吉がでっけぇ声を上げた。母ちゃんは驚いた拍子に削り節を佐吉の頭にばら蒔いちまった。
「ビックリした。なんだよ、でっかい声出して。見ろ、お前にふりかけちまったじゃないか」
　手ぬぐいで佐吉の頭の削り節を払った。
「なんで、カンナがうまくできねぇか、理由が分かったんだよ」
「で、その理由って？」
「鰹節のせいだよ」
「鰹節がどうしたんだよ」
「あれは、おいらが八つの時だ。トビの父ちゃんが足場から落っこちて死んじまって、なんも食うもんがなくてさ。そんな時、鰹節を毎日毎日食わされたことがあっただろ？　カンナで削るたんび、そのカンナくずが、鰹節の削ったのと似てっからさ。たぶん、それがトラウマになってたんだよ」
「……そうだったね。鰹節ぐらいしか食うもんがなかったっけね。お前には苦労かけたね」

母ちゃんは当時を思い出して、うどんと一緒に鼻水もすすった。
「苦労なんて思っちゃいないさ。ただ、カンナくずを見ると、死んだ父ちゃんを思い出しちまうんだよ。……たぶん」
「……そうだったのかい。すまなかったね、お前の気持ちも知らないで、鰹節なんか削っちまって」
「いいってことよ、鰹節に罪はねぇからな。ズルズル……。ん、うめぇ」
「どれ、ズルズル……。うむ、ちっとばっか薄かったかね？」
「なーに、おいらのは涙が一滴入って、いい塩加減よ」
「ズルズル……。あ、ホントだ。母ちゃんのにも一滴入ったからいい塩梅(あんばい)だ」
「ハハハハ」
「ムスコムスコ」

どうでい、いい親子じゃねぇか。こちとらも泣けてくるぜ。グスッ。

えー、ってことで、不得手の原因を解明した佐吉だが、苦手だった鉋は克服できてっか？
「おう、うまくなったじゃねぇか」
棟梁が感心した。
「死んだ父ちゃんが鰹節好きだったのを思い出して」
「……？」

ま、棟梁にはなんのことだかさっぱりだな。〝得手不得手(えてふえて)〟も読みようじゃ、何かを【得て、増えて】いくもんじゃねぇのかなぁ？　何が増えるかは人それぞれだ。
ってぇことで、不得手を克服するにゃ、まず、苦手意識の原因究明だ。そして次に、真相解明したら、それを得意分野に繋げるために、頭をプラス思考に切り替えるこった。
なー、そうすりゃ、自(おの)ずと道が拓(ひら)け、不得手を克服できるってぇ寸

法よ。
　けど、そうは言っても、そんな理屈どおりにはいかねぇって。さっきも、苦手な師匠に叱られちまってさ。
「おめぇは、何べん言っても下手くそだな」
　って。どうせ高座のこったろと思ったが、取り敢えず、
「何がですかぃ」
　って訊いたら、
「決まってんじゃねぇか、師匠の俺を立てんのが下手くそだってぇの」
　って言うもんで、意味が分からねぇでいると、
「最近、おめぇのほうが売れてんじゃねぇかよぉ、も～」
　って、子供みてぇに駄々をこねましてね。
　だから、演目をもじって言ってやったんですよ。
「師匠から良き落語を【得て、増えて】きたんですよ、良きお客様が」
と。

■■■■■■■■■
■■■■■■■■
幕■■■■■■■
■■■■■■
■■■■■